

保育界の巨人

アルワイン先生をおしみて

高崎能樹



若き日の美しいアルワイン先生が、はでな洋服を着て、自家用の馬車に乗って、毎日曜芝教会に出席せられた頃から私は先生と懇意でありました。……全く貴族的な生活で、麹町の御殿の奥からす一つとぬけ出して来られたお姫様の姿と、後の肥満型の先生とは似もつかぬものでした。

その美しいお姫様が、芝教会で日曜学校の幼稚科を教えられ、私がその上の一年のクラスを教えていましたので、教材や教法の問題で、先生の幼児教育論と私の宗教々育論とは度々衝突して論議が沸騰しました。つまり先生は私の手ごわい論敵であったのです。

その後私は牧師となつて五か年間九州に参りましたが、その間幼児教育の研究に没頭した末、これが人間教育の基であることを確信して、これを一生涯の方針として進むと堅く決意して再び上京しました。

そしてアルワイン先生を市が谷見附上の玉成保育養成所に訪うて『私をこの学校に入れてください』と頼みました。ところが先生は言下に『入れてあげません。あなたは男だから駄目です』と断わられ、『それでは、見学させて下さい』と懇請しますと『見学でしたら許します。邪魔にならぬように見学しなさい』と漸く許可を得ました。

こうして私は、フレーベルの恩物の扱い方や、母と子の遊びの解説やらを先生に学んで全く感激してしまいました。とくに子どもへのお話の巧妙なことは、天下に比類なしで、私は大いに学びました。

先生にも憂鬱時代がありました。それは小さな恩物などは有害だ。もっと大筋運動の発達を自當てにヒルの積木や、箱積木を用いよ……との主張が盛んになつたことあります。しかしジャーナルドは『親指と人差指とで物をつまみ得る能力が出たら、小筋運動を発達させよ。それが知能の発達を促進する』と主張しています。私はアルワイン先生にこれを示して恩物を遠ざけないように進言しました。先生は非常に喜んで『あなたは矢張り同志の友だ』と感謝と友情とを表明してくださいました。

教諭養成におけるアルワイン先生の『厳格主義と清潔主義』は本当に幼児を敬愛するまことにこの表われで『子どもは神の子』と思えどこそあります。なおアルワイン先生の愛はエロスの愛でなく、アガベーの愛で、神の造り給えるすべての物にゆき届いていたことを知ると『げに保育界の巨人であった』と云わねばならぬと思います。

アルワイン先生が、モンテッソリーの研究に熱心されたり、コロ

ンビヤ、コロンビヤと新知識に突進せられたりなさると、私もそれにならって熱心しましたが、しかしアルワイン先生の真生命はむしろフレーベルの『神本主義』であつて決して浮薄な『人生主義』ではありませんでした。

(阿佐谷幼稚園々長)